



Title	山岸外史『人間キリスト記』の影響と可能性：「葉桜と魔笛」を中心に
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2012, 4, p. 125-139
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/97711">https://hdl.handle.net/11094/97711</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 山岸外史『人間キリスト記』の影響と可能性

——「葉桜と魔笛」を中心に——

長 原 し の ぶ

一、一九三九年作品における『人間キリスト記』の影響

一九三八年十一月、山岸外史の『人間キリスト記』（コギト）一九三七・一二〜一九三八・六が第一書房より刊行された。これに対して太宰治は「人間キリスト記」その他（「文筆」一九三九・七）の中で、

山岸外史氏の「人間キリスト記」を、もつと、たくさんの人に読んでもらひたい、と思つてゐる。さうして、読後の、いつはらざる感想を、私は、たくさん、たくさん、聞いてみたい。それは山岸のため、といふよりは、むしろ、私自身の開眼のために聞いてみたい。私も、さうであるが、山岸の表現に就いての努力は、たつたいまのこの苦悩を、瞬時の距離に於いて切斷し、一まづ時間の流れのそとにピンセットで、つまみ出し、その断面図をありありと拡大し、

鮮明に着色して壁に貼りつけ、定着せしめることにある。<sup>(1)</sup>

と述べている。もちろん、友人である山岸の著書を宣伝する意味もあるだろうが、「山岸のため、といふよりは、むしろ、私自身の開眼のため」として『人間キリスト記』の感想を求める姿勢からは『人間キリスト記』を通した聖書解釈を自身も含めて世に問いたい思いが感じられる。

太宰と山岸の交流について、交わされた手紙を軸に吉岡真緒<sup>(2)</sup>氏が「山岸外史宛太宰治書簡はそれ自体創作活動に繋がるような内容」と指摘し、「会話にも手紙にも常に文学的緊張があった」ことを捉えている。両者の間には互いの作品に何らかの影響を与えるような文学的刺激に満ちたやり取りがあった。その中でも、山岸から太宰にもたらされた大きな影響として聖書への理解が挙げられる。相馬正一氏は「論争の内容も多くは文学論・芸術論・人生論に関するものであったが、ヨーロッパの文芸思

潮や神の問題が飛び出すと、聖書知識のない太宰は一方的に山岸の聞き役に廻らざるを得なかった<sup>3)</sup>とし、太宰が山岸から得たものとして聖書の知識を特筆している。『人間キリスト記』の「序」には次のように記されている。

聖書を買つて以来、約十年の間、自分は、ただ、ひとりの聖句愛好者として、文学作品を愛読するものの位置で、聖書を覗いてゐた程度にしかならないのだが、しかし、心理的な問題について言へば、自分は、その間、この『書物』から、かなり、得たところあるやうに考へてゐる。

『人間キリスト記』が連載される「約十年」前には山岸の中で聖書への関心と『人間キリスト記』につながる構想が脈打っていたといえる。従つて、山岸の聖書理解を一つの形にまとめた『人間キリスト記』の刊行を契機に太宰自身がそれまで山岸から得た聖書への理解と自分なりの現時点での関心に今一度目を向けたであろうことは想像に難くない。

「人間キリスト記」その他<sup>4)</sup>について太宰は山岸に宛てた葉書（一九三九・五・四）の中に「文筆」六月号に貴兄のお仕事のこと、ほんの少し書きましたが、御海客下さいまし<sup>4)</sup>と結んでいる。その前後にあたる四月～七月は、「懶惰の歌留多」（「芸」一九三九・四）、「女生徒」（「文学界」一九三九・四）、「愛と美について」（「愛と美について」一九三九・五 竹村書房）

「花燭」（「愛と美について」一九三九・五 竹村書房）、「秋風記」（「愛と美について」一九三九・五 竹村書房）、「新樹の言葉」（「愛と美について」一九三九・五 竹村書房）、「火の鳥」（「愛と美について」一九三九・五 竹村書房）、「葉桜と魔笛」（「若草」一九三九・六）などの多くの作品が発表されている。これらの作品の中で、とくに『人間キリスト記』刊行に近いものにはその影響が窺えるのではないだろうか。本論では、これまであまり考察されてこなかった一九三九年の作品に対する『人間キリスト記』の影響と可能性を探ることを目的とする。

## 二、聖書利用を促すもの

太宰がキリスト教に接近し、その理解を深めていくのは山岸からの影響だけではない。佐藤泰正氏は「太宰の聖書との決定的なかかわりが、その直後に『HUMAN LOST』(12・4)の一篇を生んだ、パピナール中毒症のための精神病院入院の時であつたこと、あるいはすでにそれに先立つ内村鑑三の書に対する異常なまでの傾斜、あるいは戦時中、鑑三門下の塚本虎二の「聖書知識」などを熱心に購読していたこと<sup>5)</sup>を指摘し、様々な形で聖書に触れていった太宰の姿を捉えている。また、聖書との関わりがいつから始まったのかについては、遠藤祐氏が「太宰治と聖書の最初の出会いは、一九三五年の夏の終りか秋の初めに求められる<sup>6)</sup>と推測する。つまり、一九三九年の段階で太宰が聖書への関心を抱き、キリスト教を作品に取り込む可

能性は十分にあったと考えられる。

一方で、一九三九年に発表された作品の中に引用された聖句は他の時期と比較すると極端に少ない。斎藤末弘氏の調査から確認すると、

「I can speak」 〔若草〕一九三九・二）	はじめに言葉ありき。よろづのもの、これに拠りて成る。 〔ヨハネ〕一章一一三）
「女生徒」 〔文学界〕一九三九・四）	ソロモンの栄華（「マタイ」六章二九）
「懶惰の歌留多」 〔文藝〕一九三九・四）	豚に真珠（「マタイ」七章六）
「秋風記」 （愛と美について）一九三九・五 竹村書房）	「富めるものの天国に入るは、——」 さう冗談に言ひかけて、 （「マタイ」一九章二三）

の僅か四作に留まる。しかし、先に挙げたように一九三九年においても確かな聖書との接点を持ち、『人間キリスト記』への言及もあることを鑑みれば直接的な聖句引用がないからといって、作品の中のキリスト教利用を否定するのは早計であろう。例えば、太宰の聖書理解の一旦を担った「聖書知識」との関連を考察する。（以下傍線は引用者）

「葉桜と魔笛」〔若草〕一九三九・六）

・私が結婚致したのは、松江に来てからのことで、二十四の秋でございますから、時としてはずるぶん遅い結婚でございます。

・私は、さう信じて安心してをりたいのでございますけれども、どうも、年とつて来ると、物欲が起り、信仰も薄らいでまゐつて、いけないと存じます。

「皮膚と心」〔文学界〕一九三九・一一）

・二十五になつて、私は覚悟をいたしました。一生、結婚できなくとも、母を助け、妹を育て、それだけを生き甲斐として、妹は、私と七つちがひの、ことし二十一になりますけれど、きりようも良し、だんだんわがままも無くなり、いい子になりかけて来ましたから、この妹に立派な養子を迎へて、さうして私は、私としての自活の道をたてよう。

・何もかも私の欲でございませう。こんなおたふくの癖に青春だなんて、とんでもない。いい笑ひものになるだけのことでございます。私は、いまのままで、これだけでもう、身にあまる仕合せなのです。さう思はなければいけません。ついつい、わがままも出て、それだから、こんどのやうな、こんな気味のわるい吹出物に見舞はれるのです。薬を塗つてもらつたせゐか、吹出物も、それ以上はひろがらず、明日は、なほるかも知れぬと、神様にこつそり祈つて、その

夜は、早めに休ませていただきました。

この二作品の共通性は結婚しない（もしくはできない）女がその後結婚し、子のない（子の存在が描かれない）状態であることである。そして、現時点ではどちらも何らかの〈欲〉を抱くことで〈信仰（神）〉を意識する図となっている。これに対して「聖書知識」二三号（一九三一・一一）には、次のように示されている。

然れども、女もし慎みて信仰と愛と潔とに居らば、子を生むことに因りて救はるべしといふテモテ前書第二章十五節のパウロの言は、一読誰にも不思議の感を懐かしめる。それは、若しこれが言葉通りに解すべきであつて、女は子を生むことに因りて救はれるものであるならば、偶々子を生む女は、それがどんなに如何はしい女であつても、悉く救はれることが出来、之に反して、独身の女、或は結婚しても子無き女は、たとえ彼女が如何に立派なる婦人であつても救はれ得ないといふ、極めて不合理なる結論を生むからである。（中略）第二章一節より第三章十三節までは、教会に於て信者は如何に振舞ふべきかを訓へたものであつて、男子は怒らず争はず、潔し心を以て祈るべく（八）、婦人は善き業を飾として祈るべきことを言ひ（九—十）、尚之に關連して、女は服従的なるべく、決して教会にて教へ、ま

た男の上に立つべからざること、その理由として、女は男より後に創造られた者であり、誘惑に陥る危険多き者であることを述べ、子を生むことに因りて救はれると、言つたのである。

つまり、二作品の〈欲〉と〈信仰〉を絡めた女の設定は、「誘惑」（欲）の多い女が「子を生む」ことで「誘惑（欲）」から解放され、純粹な信仰に至ることを説く「聖書知識」の解釈をその背景に置くことができるのではないか。

太宰と「聖書知識」の関わりについて田中良彦氏は、「太宰と『聖書知識』の出会い」は船橋在住時代（昭和一〇年七月から一年余り）<sup>9</sup>「聖書知識を介して」始まり、「伝道するような気持ちで、太宰の許へ『聖書知識』を持参し、キリスト教を話題にした」と指摘する。実際に太宰が「聖書知識」の購読を開始するのは一九四一年以降のため、一九三九年の時点で<sup>8</sup>「聖書知識」を持参し、話題にしたのかは確定できない。しかし、同年に同じ設定の女が登場する要素に「テモテ前書第二章十五節」の影響の可能性は指摘できよう。従つて、聖句利用が表面的にはほとんど窺えない一九三九年作品の中にキリスト教との接点を捉えることは有効である。

### 三、『人間キリスト記』から「駄込み訴へ」へ

山岸は『人間キリスト記』の中で、「精神家耶穌を、もし、ロマンティストといふことが出来るものとしたら、ユダは、飽くことを知らないリアリスト」(「ユダの章」三)と評し、耶穌とユダを対照的に描きながら人間耶穌像を作り上げていった。この視点が太宰の「駄込み訴へ」(「中央公論」一九四〇・二)に反映されたことはすでに多くの論者によって考察されている。

島達夫氏は、太宰が『HUMAN LOST』(「新潮」昭和二二年四月)で既にキリスト伝の構想を示している。「猶太の王。」／(「キリスト伝。」)を「プランまとまつてゐますから、ゆつくり書いてゆくつもりです」と記している「点を捉え」、「この段階では太宰は十字架にかけられる前後のキリストを描こうとしていたと考えられる。それがユダの語りによるキリスト伝へと変貌したことに『人間キリスト記』が何らかの影響を与えたと言えるのではないだろうか」と指摘する。ユダの語りですべてが展開する「駄込み訴へ」は必然的に山岸の描いたイエス対ユダの構図を一層鮮明にし、結果的に太宰独自のイエス像、ユダ像の構築に成功したといえる。服部康喜氏は山岸の功績を「人間キリスト」の究極の姿を造形していること、すなわちイエスの生涯を彼の自己意識(自己理解)の動的なドラマとして表現したことと考察したうえで「駄込み訴へ」を「太宰に残されていたのは、ユダにこの方法を適応することだったのである。そ

の自己意識(自己理解)の奈落に向かう激しさを「人間ユダ」の物語としてどのように定着すべきなのか」(11)を求めた作品と位置付けた。また、木村小夜氏は、山岸と太宰の相違点を次のように指摘する。

山岸は、浅薄ゆえの無理解から接近への努力、そして挫折へと、ユダによるイエス理解のありかたを弟子達からの感化も交えて緩やかに変貌させたが、太宰の場合は、その後半が晩餐の場というごく短時間に凝縮され劇的な変化となつて、最後の行動に結実していく因果関係は鮮明である。ただし、そこに至るまでのユダのイエスへの感情は山岸のそれとは違い、後述のように彼なりの〈明確〉な意志をもち、独自の「愛」に終始とどまり続け、一貫性を保っていると主張されるもので、それは弟子達との差異によって一層補強されて語られる。(12)

いずれも『人間キリスト記』と「駄込み訴へ」の影響関係を大きく捉え、山岸から受容した可能性のある共通性を探るとともに、二作品の相違点から太宰独自の視点を打ち出そうとするものである。(13)

本論は、「駄込み訴へ」を対象作品としていないので、影響の大きさを確認するに留めるが、『人間キリスト記』への太宰の言及から「駄込み訴へ」の発表に至る期間に一九三九年の作品を

置くとやはり『人間キリスト記』を一つの素材として作品成立を考慮することが可能だ。『太宰治全集4』の「解題」には「「駈込み訴へ」は十四年の十二月、炬燵に当つて、盃を含み乍ら、全部口述して出来た」と記されており、その執筆時期も含めると一九三九年作品と同列に扱うこともできる。つまり、「駈込み訴へ」に限定することなく、『人間キリスト記』を通した目でこの時期の作品を読み直す観点の必要性を再度主張するものである。

#### 四―一、『人間キリスト記』から「葉桜と魔笛」へ

一九三九年発表作品の中でも『人間キリスト記』との関連の強い可能性があるものとして「葉桜と魔笛」が挙げられる。三谷憲正氏は次のように述べている。

先に「校異」で見たように妹の発言は、感情の表出を抑制する方向へと向かっている。このことは妹をより静的な在り方へと導くものであろう。一方は「火」の性、もう一方は「水」の性を思わせる登場人物の取り合わせの作品はいくつかある（代表的なものとしては「駈込み訴へ」の「あの人」と「ユダ」の対立を「火と水と。永遠に解け合う事の無い宿命が、私とあいつとの間に在るのだ」という一節が集約している）。むしろ、「葉桜と魔笛」では対照的ではあるが対立的ではない。が、この動的な姉と静的な妹とい

う対比は読み取っておいいていいのではなからうか。<sup>(15)</sup>

氏は「葉桜と魔笛」の姉妹を「駈込み訴へ」のイエス（火）、ユダ（水）の対比に準えて解釈している。この視点は興味深い。なぜなら、イエスを「火」とする表現はすでに『人間キリスト記』に示されているからである。次にその該当箇所を抜き出す。

#### 『人間キリスト記』の〈火〉と〈水〉表現

・ 耶蘇の心は、唯、いつも、赤い火のやうに燃えてゐた。人を見る鋭い眼を持つてゐた。その火の心をもつて反抗し、その鋭い眼をもつて、人々を眺め、水のやうに冷静なその心で、弟子達を啓蒙し、女性に、始めて、優美な微笑と寛容とを与えてこれを慇懃んでゐたのである。（耶蘇の信仰）三

・ 耶蘇は、火のやうな言葉で、時代の誤謬を焼き払はんとした。肉体と舌によつて、火柱の如く、時代を叱咤した。純粋至上な方法であつた。（悪魔）

・ 耶蘇の日記は、火の燃えてゐる活火山の上で綴られ、砂漠の熱砂の上で語られた。（ユダの章）二

けれども、かうして燃える火となつた耶蘇が、最初から、単独で説教する行動を避け、その日常の生活さへ、秘かに、記録させるために、弟子を求めたところに、耶蘇の残るところのない深謀があつたやうに考へられる。（なんぢ等、



悔い改めよ。天国は、近づけり。」

山岸の耶穌はことごとくその性質と姿が「火」で表わされている。ユダを「水」とする箇所はないが、「火」の対義語として「水」を想起し、太宰がイエスとユダの対比をより明確にする目的で「軀込み訴へ」においてユダを「水」と表現したことは推測できるだろう。従って、「葉桜と魔笛」の姉妹の描写は『人間キリスト記』に通じると考えられる。

また、影響の可能性の一例として「口笛」と「恋」の表記が挙げられる。

「葉桜と魔笛」の「口笛」描写

それから、毎日、毎日、あなたのお庭の塀のそとで、口笛吹いて、お聞かせしませう。あしたの晩の六時には、さつそく口笛、軍艦マアチ吹いてあげます。僕の口笛は、うまいですよ。いまのところ、それだけが、僕の力で、わけなくできる奉仕です。お笑ひになつては、いけません。いや、お笑ひになつて下さい。元気でゐて下さい。神さまは、きつとどこかで見てゐます。僕は、それを信じてゐます。あなたも、僕も、ともに神の寵児です。きつと、美しい結婚できます。

『人間キリスト記』の「口笛」描写

人は、毎日死に、毎日生れ變つてゐる。むしろ、人間は、その死のやがて來たるべき自意識の上に立つて生きてゐる。従つて、人は、自殺の意識の上に生きてゐるとさへ言ひ得る。耶穌は、何時も、此の『來るべき死』の上に生きてゐた。耶穌は、『來るべき運命』と知りながら闘つてゐた。危険な戦場における兵士の意識をもつてゐた。この悲壯な覺悟を、耶穌は、ただ、平和の時に持つてゐた。眼にみえぬ人生の戦線で一人たたかつた。『我は語り、我は叫び、笛を吹けども、誰も踊らず。』耶穌の精神こそ、悲壮美の極であつたといふより他はない。（耶穌の布教）三

「口笛」の考察はすでに花崎育代氏が「葉桜と魔笛」で回想された時空の直前の明治三三年に「マアチ」として編曲發表された「軍艦マアチ」を、「むかしから」の文学者の恋愛描写として、その歌詞自体に恋愛の駆け引きを比喩的に重ねてみることも容易<sup>16)</sup>と述べるなど時代性を軸にした解釈がなされている。「口笛」の内容が時局を意識させる「軍艦マアチ」である点は重要であるが、一方で「口笛」を吹く行為自体が「神さまは、きつとどこかで見てゐます」という神の視線を意識する「僕」の覺に結び付けられている点にも注目したい。

『人間キリスト記』に「口笛」描写はなく、「笛」が登場する。耶穌の教えが「笛」を吹く行為で説明され、それが人々に伝わ



らないもどかしさと悲壮さが「たたかい」として描かれている。山岸が「悲壮美の極」と評した耶穌の姿を神だけが知っているのである。この場面を背景に置けば、「葉桜と魔笛」では、「笛」を自身の身体から直接発する「口笛」に置き換えることでより神と「僕」（姉）の関わりを鮮明にし、「口笛」の、その音を聞くことで、また鳴らすことで「ともに神の寵児」としての役割を果たす意味が理解できる。

#### 「葉桜と魔笛」の「恋」描写

・私は、それにきめてしまつて、若い人たちの大胆さに、ひそかに舌を巻き、あの厳格な父に知れたら、どんなことになるだらう、と身震ひするほどにおそろしく、けれども、一通づつ日附にしたがつて読んでゆくにつれて、私まで、なんだか楽しく浮き浮きして来て、ときどきは、あまりの他愛なさに、ひとりですくす笑つてしまつて、おしまひには自分自身にさへ、広い大きな世界がひらけて来るやうな気がいたしました。私も、まだそのころは二十になつたばかりで、若い女としての口には言えぬ苦しみも、いろいろあつたのでございます。

・妹たちの恋愛は、心だけのものではなかつたのです。もつと醗くすすんでゐたのでございます。私は、手紙を焼きました。一通のこらず焼きました。M・Tは、その城下まちに住む、まづしい歌人の様子で、卑怯なことには、妹の病

気を知るとともに、妹を捨て、もうお互ひ忘れてしまひませう、など残酷なこと平気でその手紙にも書いてあり、それつきり、一通の手紙も寄こさないらしい具合でございましたから、これは、私さへ黙つて一生ひとに語らなければ、妹は、きれいな少女のままで死んでゆける。

#### 『人間キリスト記』の「恋」描写

恋といふ言葉は、この場合、不穏当な言葉かも知れない、人間にとつて、恋心くらゐ決定しがたいものは少ない。却つて、『好き』或ひは『嫌ひ』といふ卑俗な言葉の方が、人間の心を考へる単位になりやすい。『恋』といふ曖昧な言葉くらゐ若い人間を欺いてゐるものはない。

#### （「マルタの妹マリヤ」二）

「葉桜と魔笛」の中では「恋」が物語転換に欠かせない要素としてある。ただし、この「恋」は妹からすると虚構であり、姉からすると偽装である。それが相手を思いやる心から発したものであつたとしても「恋」が偽りの象徴として描かれているのだ。そして、『人間キリスト記』には耶穌の「恋」が語られ、その「曖昧さ」「人間を欺く」言葉として説明される。

以上のように、「葉桜と魔笛」に対する『人間キリスト記』の関わりを捉えることができる。しかしながら、「駆込み訴へ」に至る影響関係のように『人間キリスト記』の中心人物である耶

蘇とユダが「葉桜と魔笛」の姉妹に直接的に繋がるわけではない。姉妹の対照性を妹（水）⇨ユダ、姉（火）⇨イエスと単純に分析するわけにはいかない。寄り添って生きている姉妹にとってお互いは反発する存在ではなく、むしろ共通性も多く見られるつまり、「葉桜と魔笛」には『人間キリスト記』に示された耶穌とユダの物語以外の要素が重なる可能性がある。

#### 四―二、『人間キリスト記』の二人の「マリヤ」

『人間キリスト記』の中で対照構造を持つのは耶穌とユダだけではない。山岸は耶穌を巡る三人の女性を登場させている。母マリヤ、マグダラのマリヤ、マルタの妹マリヤである。特にマグダラのマリヤとマルタの妹マリヤの二人は対照的に描かれており、恋愛を軸にした耶穌の人間らしさを描き出すために二人のマリヤに詳細な肉付けをほどこしている。その描写が「葉桜と魔笛」の姉妹に重なると考える。その共通性を次に挙げる。（番号は二つの作品で対応させている）

##### 「葉桜と魔笛」の姉の描写

①早くから母に死なれ、父は頑固「徹の学者気質で、世俗のことには、とんと、うとく、私があくなくなれば、一家の切りまはしが、まるで駄目になることが、わかつてゐましたので、私も、それまでにいくらかも話があつたのでございますが、家を捨ててまで、よそへお嫁に行く気が起らなかつ

たのでございます。

②せめて、妹さへ丈夫でございましたならば、私も、少し気楽だつたのですけれども、妹は、私に似ないで、たいへん美しく、髪も長く、とてもよくできる、可愛い子でございましたが、からだが弱く、その城下まちへ赴任して、二年目の春、私二十、妹十八で、妹は、死にました。

③神さまは、或る。きつと、ある。私は、それを信じました。妹は、それから三日目に死にました。医者は、首をかしげてをりました。あまりに静かに、早く息をひきとつたからでございませう。けれども、私は、そのとき驚かなかつた。何もかも神さまの、おぼしめしと信じておりました。（中略）いや、やつぱり神さまのお恵みでございませう。私は、さう信じて安心してをりたいのでございますけれども、どうも、年とつて来ると、物欲が起り、信仰も薄らいでまゐつて、いけないと存じます。

##### 『人間キリスト記』のマルタの妹マリヤの描写

①マグダラのマリヤは、すべてを男に投げ込んで生きた女であつたが、マルタの妹マリヤは、自分の家を考へ、自分の父親を考へ、母親を考へ、悲劇を避けた女である。（「マルタの妹マリヤ」一）

②男性への信仰が、却つて、このマリヤに七つの悪霊を与へたけれども、しかし、マルタの妹マリヤは、平凡な乙女の

姿をもつて生れた。却つて、特徴が少なかった。悲劇的でなかつた。(「マルタの妹マリヤ」一)

③マリヤは、耶蘇から愛せられてゐることを、意識してゐた女のやうに思はれる。(「マルタの妹マリヤ」二)

「葉桜と魔笛」の姉は①のように適齡期であるにも関わらず結婚をしないままでいた。その一番の理由は「家を捨ててまで」という家族を思う気持ちである。これは『人間キリスト記』のマルタの妹マリヤと一致する。マルタの妹マリヤもまた、恋愛よりも家族を優先させた女性であつた。また、②で姉は妹の美しい容姿と比較する形で自身の姿を語っている。マルタの妹のマリヤも、他のマリヤ(マグダラのマリヤ)に「美しい」という表現が使用されるのに対して「平凡」「特徴が少な」いことが強調される。このように、姉の設定そのものに『人間キリスト記』のマルタの妹マリヤの影響をみることが出来る。さらに、③に着目すれば、姉が口にする「神」と「信仰」は、「信仰も薄らいでまゐつて、いけない」という言葉とは裏腹に「神」の存在を意識しているがゆえに出てくるものである。そうであるならば、マルタの妹マリヤが誰よりも耶蘇から愛されその愛を「意識してゐた女」であつたという箇所にも通じるであろう。それに対して、妹の描写はどうであらうか。

「葉桜と魔笛」の妹の描写

①せめて、妹さへ丈夫でございましたならば、私も、少し気楽だつたのですけれども、妹は、私に似ないで、たいへん美しく、髪も長く、とてもよくできる、可愛い子でございましたが、からだが弱く、その城下まちへ赴任して、二年目の春、私二十、妹十八で、妹は、死にました。

②妹は、もう、よほどまへから、いけなかつたのでございませう。腎臓結核といふ、わるい病気でございまして、気のついたときには、両方の腎臓が、もう蟲食はれてしまつてゐたのださうで、医者も、百日以内、とはつきり父に言ひました。どうにも、手のほどこし様が無いのださうでございませう。

③妹も、そのころは、痩せ衰へて、ちから無く、あまり何かと私に無理難題いひつけて甘つたれることが、なくなつてしまつて、私には、それがまた一そうつらいのでございませう。

④M・Tは、その城下まちに住む、まづしい歌人の様子で、卑怯なことには、妹の病氣を知るとともに、妹を捨て、もうお互ひ忘れてしまひませう、など残酷なこと平気でその手紙にも書いてあり、それつきり、一通の手紙も寄こさないらしい具合でございましたから、これは、私さへ黙つて一生ひとに語らなければ、妹は、きれいな少女のままで死んでゆける。

⑤姉さん、ばかにしないでね。青春といふものは、ずるぶん大事なもののよ。あたし、病気になつてから、それが、はつきりわかつて来たの。ひとり、自分あての手紙なんか書いてるなんて、汚い。あさましい。ばかだ。あたしは、ほんたうに男のかたと、大胆に遊べば、よかつた。あたしのからだを、しつかり抱いてもらひたかつた。姉さん、あたしは今までいちども、恋人どころか、よその男のかたと話してみたこともなかつた。姉さんだつて、さうなのね。姉さん、あたしたち間違つてゐた。お俐巧すぎた。ああ、死ぬなんて、いやだ。あたしの手が、指先が、髪が、可哀さう。死ぬなんて、いやだ。いやだ。

⑥神さまは、或る。きつと、ゐる。私は、それを信じました。妹は、それから三日目に死にました。医者は、首をかしげてをりました。あまりに静かに、早く息をひきとつたからでございませう。けれども、私は、そのとき驚かなかつた。何もかも神さまの、おぼしめしと信じてゐました。

『人間キリスト記』のマグダラのマリヤの描写

⑤時として、卑俗な学者が、この型に、娼婦の型といふ陳腐な名前を与へたが、実は、この宿命の型は、愛情を人生至高の境地と本能してゐる純粹な型を意味してゐるのに過ぎない。ただ、かかる女性には、屢々、常識の世界から失墜したり、転落したりする。転々する。却つて、男性を信仰し

すぎてゐた女性の末路をみせる。けれども、その裏面で、かかる女性が、どれほど男性を信じやすい本能をもつて生れてゐたかをみない訳にはゆかない。〔マグダラのマリヤ〕一

⑤心をつくして求めながら、はじめて男に捨てられてゆくものの悲哀を味はつた。わづかにのこつてゐた誇が、はげしく傷つけられてゆくことを意識したが、しかし、それにも反抗することは出来なかつた。これは失恋したもののものもつ心であつた。マリヤはまさに、まさしく、耶穌に恋をし、そして、失恋した女である。〔マグダラのマリヤ〕一

①③マリヤの心は、次第に衰へはじめた。頬の肉は痩せ、眼は大きくなつた。肌の色は蒼味をおびて透きとほり、睫毛はくろく長くなつた。何時も、土をみて歩く女になつた。美しかつた。ほんとに美しく見えるやうになつた。〔マグダラのマリヤ〕一

④⑥マリヤははじめて、この失意のどん底で耶穌の仕事の意味に気付きはじめた。耶穌が単なる生活者ではなく、仕事のために生きてゐる人間であることを知るやうになつた。その上、マリヤは、耶穌に接するたびに、その愛着と信仰を増す一方であることを悟つたから、マリヤはその生涯を耶穌に奉仕して生きようと決心した。マグダラのマリヤこそ、最高の男性に最高の恋をした女であつたといつていい。

〔マグダラのマリヤ〕二

②マグダラのマリヤは、宿命をもつて生れ、誇をもつて生れ、高い本能をもつて生れた。その誇が、マリヤを、却つて、淪落させた。男性への信仰が、却つて、このマリヤに七つの悪霊を与へたけれども、しかし、マルタの妹マリヤは、平凡な乙女の姿をもつて生れた。〔マルタの妹マリヤ〕二）  
④⑥繰り返して書くやうだが、マグダラのマリヤは、耶蘇に失恋した女だといふことができる。耶蘇は、このマリヤを救つたやうに思ふが、しかし、それは、失恋を救つたことではなく、信仰を与へたことに過ぎない。〔マルタの妹マリヤ〕一）

①②③から窺えるように妹には「美し」と「わるい病氣」という特徴が付されている。腎臓結核で「痩せ衰へ」弱つていくにも関わらず変わらぬ美しさが語られる。これは姉の描写と対照的なものであり、『人間キリスト記』ではマグダラのマリヤの説明につながる。マグダラのマリヤの容姿は当初際立ったものとしては描かれていなかったが、耶蘇との失恋を切掛けにしてその心が「次第に衰へ」「頬の肉は痩せ、眼は大きく」なり、「ほんとうに美しく見えるやうに」変化している。そして、妹を蝕む病氣にはマグダラのマリヤに与えられた「七つの悪霊」が重なる。

山岸はマグダラのマリヤを「男性の愛情なしに、生きてゆき難い女性」〔マグダラのマリヤ〕一）と捉え、それまでの一般

的な「娼婦」像とは異なる視点で男性至上主義者と考えている。このマグダラのマリヤの男性（愛）への固執が⑤に確認できる妹の「恋愛」への憧憬と④における疑似恋愛行為に派生したと考察できる。

そして、「医者」は、首をかしげてをりました」というような妹の死の唐突さと安らかさを鑑みれば、そこにも『人間キリスト記』の影響を指摘できる。マグダラのマリヤは「心から信ずることの出来る男性を耶蘇の姿に見」、「自分の求めてゐた宿命の男の姿を、耶蘇の中に本能した」〔マグダラのマリヤ〕一）がその恋は成就することはなかった。失恋の痛みの中、「耶蘇が単なる生活者ではなく、仕事のために生きてゐる人間である」とくに気付き、「その生涯を耶蘇に奉仕して生きようと決心」するに至る。山岸はこのようにマグダラのマリヤを描いたうえで、耶蘇がマグダラのマリヤに与えた救済は「失恋を救つたことではなく、信仰を与へたこと」にあると解釈する。この信仰の問題を「葉桜と魔笛」に見れば、現実における妹の「恋愛」は失敗であり、普通の女性としての生を全うできなかった悔恨が強く残る。しかし、その絶望の果てにもたらされた安らかな死には姉が「何もかも神さまの、おぼしめし」と理解するように不可思議な力が働いていると考えられる。妹の信仰心に関しては作中で一切触れられておらず、姉の視点から読み解く他ない。けれども、姉が「神さま」の存在を度々口にすることから、妹にもまたその素地のあることを推測させる。次の箇所に着目す

る。

そのとき、ああ、聞こえるのです。低く幽かに、でも、たしかに、軍艦マアチの口笛でございます。妹も、耳をすましました。ああ、時計を見ると六時なのです。私たち、言ひしれぬ恐怖に、強く強く抱き合つたまま、身じろぎもせず、そのお庭の葉桜の奥から聞こえて来る不思議なマアチに耳をすまして居りました。

この「口笛」は後に姉により父親の仕業という注釈がつくが、少なくともこの地点では神憑りのな力を姉妹は感じていた。その力を信じたまま妹は死を迎えたのである。このように、妹の造形には『人間キリスト記』のマグダラのマリヤからの影響を考察することができるといえる。

#### 四―三、「物欲」による「信仰」の変化

「葉桜と魔笛」では最後に現在（三五年後）の姉の様子が記される。

父が在世中なれば、問ひただすこともできるのですが、父がなくなつて、もう、かれこれ十五年にもなりますものね、いや、やつぱり神さまのお恵みでございませう。私は、さう信じて安心してをりたいのでございすけれども、どう

も、年とつて来ると、物欲が起り、信仰も薄らいでまゐつて、いけないと存じます。

ここでは、妹の死に纏わる一連の出来事を神の行為として信じていたいという思いとそれを邪魔する「物欲」の存在が示されている。「信仰」と「物欲」についても山岸は『人間キリスト記』の中で述べている。

#### 『人間キリスト記』の「信仰」と「物欲」

・或る場合には、祈によつて、弱くなつてゐる自分を鼓舞し、また神に救ひを求め、人間らしい動搖を示しはしたが、しかし、その方針は、つひに、一貫して不変であつた。その上で、自分を十字架したのであるから、これは、信じていいことだと考へる。少なくとも、信ずるといふこの言葉で現す以外にその気持を表現する言葉は人間には与へられていない。耶蘇は、信じられんがために、行為したと言つても過言ではない。『信仰』とは、さういふ心を指すのだと、改めて、解釈すべきだと思ふ。ひとつの純粹な方針に邁進した努力に対しておくる餞別の言葉だと思ふ。（「十字架について」一）

・『この時より、イエス、教を宣へはじめて言ひ給ふ。「時刻は、地に満ち、天に満てり。なんぢ、悔い改めよ。いまだ、神の国は近づけり。天国は、近づきけり。』この後の耶蘇



は、人々を見ること木偶のやうな自由さをもつて、また、岩や樹に語る自由な心をもつて、説教した。貫徹しなければ「己み」がたい欲情があつた。それは、欲求といふ言葉で、品よく語るよりも、遙かに、肉のもつてゐる情欲であつた。真理を説き、人間を啓示することに、未だ曾て、欲情をもつた男は耶穌以外はあなかつたのに相違ない。耶穌の性欲、耶穌の物欲、その凡ての欲情は、ただ、この真理を説くことに燃焼した。耶穌は、真理を肉体化した男である。その後の耶穌は、考へた男ではない。「なんち等、悔い改めよ。天国は、近づけり。」

山岸は「信仰」について、「信ずる」という言葉を唯ひたすらに発する行為だと考へている。「葉桜と魔笛」においても姉は「神さまは、在る。きつと、ある。私はそれを信じました」と當時を振り返り、今もなお、「信じて安心してをりたい」とその「信仰」を貫くために言葉を繰り返している。姉の「信仰」の内実は必ずしも宗教的なものとはいえず、そこには、妹の死を神の存在の中に置くことでその不幸であつた生にせめてもの明りを灯したいという心情があるだろう。そして、その「信仰」が揺らぐ原因となつてゐる「物欲」が具体的に何であるかは描かれていない。

山岸は「物欲」をはじめとする「性欲」、「凡ての欲情」を「人間を啓示」する「己み」がたい欲情」として耶穌の肉体その

ものと捉え、その燃焼により「真理を肉体化」し教えを説こうとしたと分析している。これはあくまでも耶穌に関する解釈であり、姉に直結するとは言えないが、『人間キリスト記』では「物欲」も含めた欲が「信仰」を授ける一点に収斂されるべきものであるはずが、「葉桜と魔笛」ではその乖離として使用されていることは面白い。ここで、山岸の解釈を「物欲」が偶々何に注がれるかによつてその対象が強化されることを考慮すれば、姉の「物欲」が「信仰」とは真逆に働いたことも理解できる。「父がなくなつて、もう、かれこれ十五年」という歳月が経過し、改めて過去を振り返ったとき、その後の語られぬ人生を含めた何かが「物欲」という表現で精神を支配し、過去の美しい記憶（「信仰」）を脅かすに至つてゐると推察できる。しかしながら、それでもなおその「信仰」の揺らぎを「いけない」と踏みとどまろうとしてゐるところに姉が三五年後に再び妹の死を含めた出来事を物語る意味があるといえる。

以上のように、「葉桜と魔笛」には『人間キリスト記』の影響を見ることができ、素材の一つとして『人間キリスト記』を扱うことで新たな読みの可能性が生まれるのではないかと考える。



注(1) 『太宰治全集11』(一九九九・三、筑摩書房)

(2) 吉岡真緒氏はとくに「虚構の春」(『文学界』一九三六・七)に利用された手紙に着目し、「彼らにとつて手紙は文学的格闘」だったとする。『太宰治と山岸外史——書簡に見る文学的格闘』二〇〇六・三、翰林書房)

(3) 相馬正一「太宰治と山岸外史」(『解釈と鑑賞』一九八五・一一、至文堂)

(4) 『太宰治全集12』(一九九九・四、筑摩書房)

(5) 佐藤泰正「太宰治と聖書——マタイの一句をめぐる」(『国文学』一九六七・一一、学燈社)↓佐藤泰正著作集⑤一九九七・二、翰林書房)

(6) 遠藤祐氏は「全集別巻の「年譜」から「無教会派の信者 鯨崎潤との交友が一九三五(昭和一〇)年「八月下旬」に始まったこと」や「翌年一〇月の武蔵野病院入院後間もなく……「朝日新聞」と聖書とを購読」という記述と作品・エッセイへの聖句引用のはじまりから考察している。(『太宰治と聖書——一九四〇・一九四一年を中心に』「太宰治研究」二〇〇〇・二、和泉書院)

(7) 斎藤末弘氏によれば一九四〇年の聖書引用は三五箇所、一九四一年は一〇箇所あり、一九三九年は全作品発表年の中でも二番目に少ない年となっている。(『太宰治と聖書』「太宰治と聖書」一九八三・五、教文館)

(8) 田中良彦「太宰治と聖書知識」(『太宰治と聖書』一九八九・五、教文館)

(9) 田中良彦氏が「太宰は昭和十六年より、塚本虎二が主宰する「聖書知識」を購読」と指摘している。(『太宰治とキリスト教』「解釈と鑑賞」一九九六・一一、至文堂)

(10) 島達夫氏は「HUMAN LOST」中の「猶太」のルビに注目し、「人間キリスト記」との影響関係を指摘している。(『人間キリスト記』「その他」について「太宰治研究19」二〇一

一・六、和泉書院)

(11) 服部康喜「駄込み訴へ」と聖書——「人間イエス」の系譜——(『太宰治研究19』二〇一一・六、和泉書院)

(12) 木村小夜「駄込み訴へ」を読む——山岸外史「人間キリスト記」との接点から」(『ichio 太宰治101』二〇一〇・一〇、文化科学高等研究院)

(13) 『人間キリスト記』と「駄込み訴へ」の表現上の共通性と差異を調査したものとして、他にも菊田義孝「ユダの心——「駄込み訴へ」と山岸外史「人間キリスト記」」(『国文学』一九七六・五、学燈社、田中良彦「太宰治とキリスト教——山岸外史との関係から」(『太宰治と「聖書知識」一九八三・一〇、朝文社)などがある。

(14) 山内祥史「解題」(『太宰治全集4』一九九八・七、筑摩書房)

(15) 三谷憲正「葉桜と魔笛」評釈(二)(『太宰治研究19』二〇一一・六、和泉書院)

(16) 花崎育代「葉桜と魔笛」論——ロマネスクの外／追想の家族——(『太宰治研究4』一九九八・六、和泉書院)

(17) 「人間キリスト記」には耶穌の母マリヤは「生涯、我が子 基督の詩人性と情熱とを認めることが出来なかつた」「愚かな母親」として描かれており、信仰という面に結びつかないただただ「愛情」の人という捉え方がなされている。(『耶穌の母マリヤ』一)

(18) 「人間キリスト記」には「マルタの妹マリヤと、マグダラのマリヤとは、極めて、対照的な女であると言へよう」と記されている。(『マルタの妹マリヤ』一)